

宍道湖ヤマトシジミ資源調査

(汽水域有用水産資源調査)

松本洋典・雑賀達生・寺戸稔貴・渡部幸一

1. 目的

宍道湖のヤマトシジミ漁業は漁業者による自主的な資源管理のために、資源量およびその動態の把握を目的としたヤマトシジミ資源量調査、さらに生息状況の変化を捉える目的で月1回の定期調査を実施した。

2. 方法

(1) 資源量調査

調査には試験船「ござ」(8.5 トン)を使用した。調査定点は図1に示す通り、松江地区、浜佐陀地区、秋鹿・大野地区、平田地区、斐川地区、宍道地区、来待地区および玉湯地区の計8地区について、それぞれの面積に応じて3~5本の調査ラインを設定し、水深0.0~2.0m、2.1~3.0m、3.1~3.5m、3.6~4.0mの4階層の水深帯ごとに調査地点を1点ずつ計126点設定し、水深層毎の面積と生息密度を基に宍道湖全体の資源量を推定した。2024(令和6)年度は、春季(6月3、4、6日)と秋季(10月7、9、10日)の2回実施した。

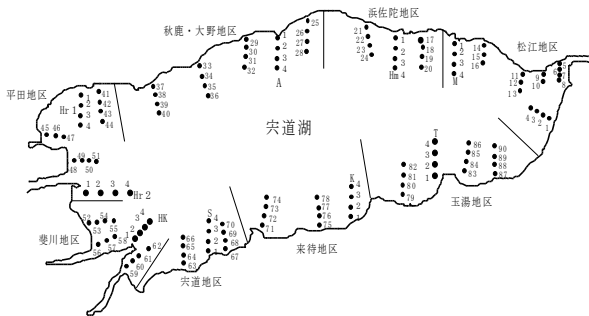


図1 ヤマトシジミ資源量調査 調査地点

ヤマトシジミの採取は、スミス・マッキンタイヤ型採泥器(以下、SM型採泥器)(開口部22.5cm×22.5cm)を用い、各地点2回、採集面積0.1㎡で採泥を行い、船上でフルイによるサイズ選別をした。フルイは目合2mm、4mm、8mmの3種類を使用した。なお、個体数・重量についてはSM型採泥器の採集効率を0.71として補正した値を現存量とした。

(2) 定期調査

試験船「ござ」により、図2に示す宍道湖内4

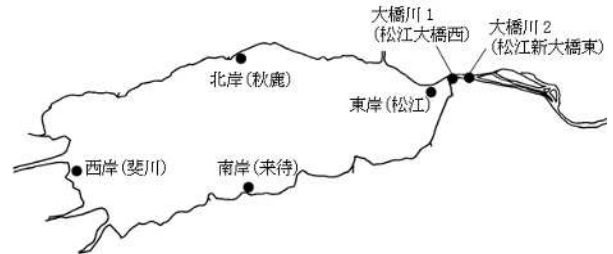


図2 ヤマトシジミ定期調査 調査地点

地点(水深約2m)、および大橋川2地点(水深約4m)において、毎月1回の頻度で生息環境、生息状況、産卵状況等を調査した。なお、大橋川2の定点は調査当日の海象の悪化、河川内の船の往来の状況により観測ができなかった。

① 生息状況調査

調査地点ごとに、SM型採泥器で5~18回採泥し、4mmと8mmのフルイ(採泥1回分については0.5mmフルイも併用)を用いてふるった後、1㎡当たりのヤマトシジミの生息個体数、生息重量を計数した。個体数、重量についてはSM型採泥器の採集効率を0.71として補正した値を現存量とした。また全てのフルイの採集分についてヤマトシジミの殻長組成を計測し、合算して全体の殻長組成(1㎡あたり個数)を算出した。なお、資源量調査を実施する6月と10月は欠測とした。

② 肥満度調査

ヤマトシジミの産卵状況や健康状態を調べるため、毎月調査地点ごとに殻長12mm以上の20個体を抽出し、殻長・殻幅・殻高・重量・軟体部乾燥重量を計測し、肥満度を求めた。ただし、 $\text{肥満度} = \text{軟体部乾燥重量} \div (\text{殻長} \times \text{殻高} \times \text{殻幅}) \times 1000$ とした。

3. 結果

資源量調査および定期調査の調査結果詳細は添付資料「2024年度ヤマトシジミ資源量調査結果」(以下同じ)に一括して示し、以下に概要を記す。

(1) 資源量調査

① 資源量推定結果(表1)

春季のヤマトシジミ資源量は3万1千トンで、昨年秋季の4万7千トンから大きく減少した（1998（平成10）年以降の春季平均値4万1千トンの75%）。その後、やや回復し、秋季は4万3千トン（1997（平成9）年以降の秋季平均値5万4千トンの79%）となった。

表1 2024年度ヤマトシジミ資源量調査結果

春季						
深度	面積 (km ²)	標本数	固体数密度 (個/m ²)	総個体数 (百万個)	重量密度 (g/m ²)	推定重量 (t)
0～2.0m	7.69	30	2,672	20,545	1,544	11,872
2.1～3.0m	6.18	37	2,478	15,312	2,009	12,416
3.1～3.5m	4.76	28	1,555	7,399	1,175	5,594
3.6～4.0m	5.33	28	821	4,373	198	1,053
計	23.96	123	1,988	47,630	1,291	30,934

秋季						
深度	面積 (km ²)	標本数	固体数密度 (個/m ²)	総個体数 (百万個)	重量密度 (g/m ²)	推定重量 (t)
0～2.0m	7.69	32	6,465	49,719	2,602	20,009
2.1～3.0m	6.18	34	5,738	35,458	2,642	16,327
3.1～3.5m	4.76	30	3,057	14,550	1,088	5,180
3.6～4.0m	5.33	28	1,836	9,786	206	1,098
計	23.96	124	4,571	109,512	1,779	42,614

また、殻長17mm以上の漁獲対象資源についても、春季2万3千トンから秋季には2万7千トンと増加し、サイズ別の報告がある平成14年以降の秋季平均値1万9千トンを上回っていた(図3)。

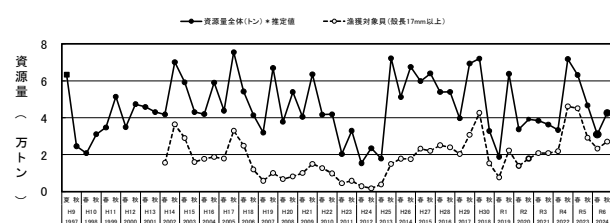


図3 資源量調査におけるヤマトシジミ資源量の推移

② 殻長組成 (図4)

今年度の殻長組成について昨年度と比較すると、春季には全てのサイズで昨年度よりもかなり少なかったものが、殻長12mm未満のサイズを中心に秋季には増加し、資源個体数は回復傾向をみせた。

(2) 定期調査

① 生息状況調査 (添付資料参照)

宍道湖内4定点のヤマトシジミ成貝生息個体数密度は、東岸で4月～9月にかけて平年を下回っ

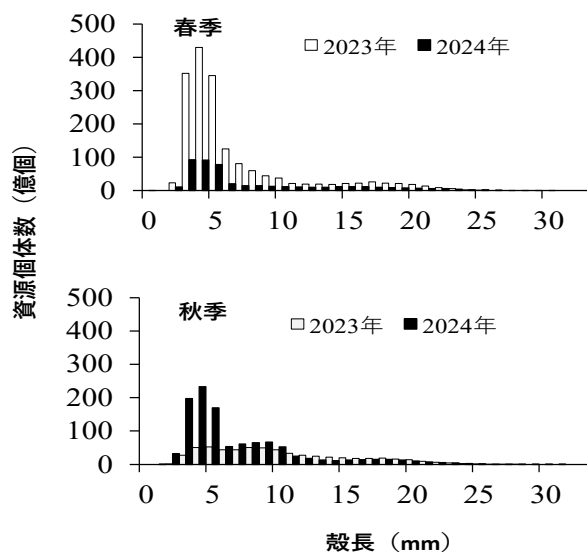


図4 資源量調査におけるヤマトシジミの殻長組成

ていたが、11月以降は平年並みで推移した。西岸では、4、7月は平年を大きく上回っていたが、それ以外の月は概ね平年を下回っていた。南岸では、年間を通じて平年を大きく下回っていた。北岸では4、9、11月は平年並みであったが、その他の月は平年を下回る水準で推移した。

大橋川のヤマトシジミ生息密度については、大橋川1で9月までは平年を大きく下回っていたが、11月以降は平年に近い水準に回復しつつあった。

③ 肥満度調査

肥満度(肥満度=軟体部乾燥重量(g)×1000/(殻長×殻高×殻幅(mm)))は産卵のため春季に増加し、産卵に入ると徐々に減少するという例年のパターンどおりに推移した。

4. 成果

調査で得られた結果は、毎月の調査終了後速やかにとりまとめ、宍道湖漁業協同組合と所属する漁業者のほか、島根県および松江市、出雲市の関係各所に提供することで、ヤマトシジミの資源管理を行う際の資料として活用された。